

道外研修〔宮城県〕3日目

報告者：1年F組 山内 陸叶 & 田村 妃菜

- ・NPO 森は海の恋人舞根森里海研究所にて海洋実習、生物観察・講義
- ・唐桑半島ビジターセンター（三陸地方 リアス海岸の観察）
- ・ホテル観洋にて震災体験者講話

森は海の恋人

カキを養殖している現場を見学しました。小さな船で、筏が浮かんでいるところまで行き、実際にカキの養殖が行われている様子を見学させていただきました。

カキの養殖は、筏の木のつなぎ目に縄をつるし、それにカキの種をくっつけます。100年前、カキに種がどんどんくっついていくことを発見し、このやり方が主流になりました。

カキの旬は冬だといわれていますが、本当は春から初夏にかけてで、その理由はスプリングブルームにより、エサの植物プランクトン・藻類が大量発生し、たくさん栄養が摂れるからだそうです。



図1 カキの養殖場見学



図2 畠山さんのお話

昔、カキは自然に生息している個体を獲って食べるだけだったそうですが、ルーズベルトの、「これからの漁業は獲るのではなく作るのだ。」との一言で、養殖が始まったそうです。他にも、生物には亜鉛とグルコースが必要であり、亜鉛がカキには多く含まれているので、健康を保つことに有効であると同時に、子孫繁栄にもとても良いそうです。

北海道で養殖しているカキも、種は宮城県から来ているそうで、驚きました。畠山さんは、世界的にも名の知れた方で、とても貴重な時間を過ごすことができました。

右の写真が九九（くく）鳴き浜です。

東日本大震災による地殻変動で、70センチメートルも陸が沈んでしまいました。九九鳴き浜という名前の由来は、「浜の砂ですり足をすると、キュッキュッと音がするから」だそうです。

北海道では、1月に海を見ることなどないので、新鮮でした。さらに、海水の温度が低いので、微生物が少なく、冬の宮城ならではの海を観察することができました。



図3 九九鳴き浜

唐桑半島地学巡検

地学巡検では、案内人の方と一緒に、約2時間、唐桑半島を歩きました。そのなかで、津波から逃げるとき、川に向かってはいけないといったことや、堤防は土で作るほうがコンクリートで作るよりも、もつのではないかと、といった話など、震災に関する興味深い話をしてくださいました。また、海の幸だけでなく、野菜もおいしいなど、自然の悪いところだけでなく、良いところも伝わってくる面白い研修でした。



図4 案内人の千葉正樹さん
唐桑観光ガイドの会長



図5 鵜たち（海にいるからウミウ、とは限らない）



図6 津波石

先の東日本大震災の津波によって、海中から浜（磯辺）に打ち上げられたとみられる。周囲の岩場と比べ白っぽい。

震災講話

震災講話では、南三陸ホテル観洋の従業員であり、防災士である伊藤さんから、実際に津波を体験した話を聞きました。震災時はホテルにいて、窓から見ると、引き波がすごく、いつもなら海なのに、一帯の地面が見え、その後、海が迫ってきた。また、震災後もホテルが避難所なので、そこで過ごした。とにかく水がなく、風呂に入る余裕もなく、洗濯は川で洗っていた。家族は無事だったが、知り合いは亡くなった方もいた。

これらの体験が、「千年に一度の災害」なら、千年に一度の学びと捉え、「千年語り継ぐ」と仰っており、語り部としての覚悟を感じた。



図7 ホテル観洋の防災士であり語り部でもある伊藤俊さんの震災講話を聞いている私たち